異世界のどこかで！？

Ｒｙｏｕ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界のどこかで！？

【Ｎコード】
Ｎ８３３４Ｄ

【作者名】
Ｒｙｏｕ

【あらすじ】
とある高校の高校生水月蓮（ミナズキレン）彼は何の意味も無く異世界に来てしまった。果たして彼はこの世界で生きていけるのか？どきどきはらはらの異世界冒険記。今日も彼は生き抜きます！！

異世界

ここはどこだ？
俺の名前は水月蓮趣味（ミナズキ レン）は、料理。特技は、剣術。
ただいま見知らぬ森で遭難中だ。

「あ～本当にここはどこだ？俺さっきまで学校にいたよな？」

そう、俺はさっきまでたしかに学校にいた。でも今の俺は森で遭難中。
どうなってるんだ？いや、まて冷静になろう。考えられることはいくつかある。
一つ目、ここは夢の中で俺は教室で熟睡している。
２つ目、俺には、実は妄想癖があり頭の中だけおかしな世界にいる。
３つ目、ぶっちゃけ拉致られた。
４つ目、ここは、地球ではなく異世界。
の４つがある。
まずここが夢の中というのはありえないな。だって、頬抓ったり自分の顔面を
殴ったらかなり痛かったからだ。
じゃあ２つ目、これが一番ありえないな。だいたい俺は妄想癖なんかじゃない！！
３つ目、拉致られた。う～んこれも可能性低いんだよな。だいたい拉致ったのに森に
放置するなんて考えられない。
じゃあやっぱり４つ目。今のところこれが一番有力だな。見知らぬ森に見たことの無い
生物・・・・生物！？
「なんがこいつは！！！！！」

いつからいた！？そんなことよりなんだこいつ気、気持ち悪い。なんていうか外見が
グロテスクだ。だいたい目が３つあるってどんな生物だよ。それになんかでかいし。
「くそ、なんか武器になるものはないのか？」
周りを見回したが何も無かった。絶望的だ。
「とにかくここは逃げよう。逃げているうちに何か見つかるだろう。」
必死に逃げた。ここは森の中あの巨体では自由に動くことはできまい。
やはりヤツは木とかがじゃまで動けずにいた。
よっしゃあ～！！と思った数瞬後。ヤツは、木や森を破壊しながらこっちに近づいてきた。
「げ！！！まじかよ。早く武器探さないと追いつかれて食われちまうよ。
どこだ～～。」
ああ、どんどんヤツが近ずいてくる。やばい！まじで追いつかれる。だいたいなんで
あいつはあんなに足？が早いんだよ。おかしいだろ。そう文句をいってやろうかと思ったとき
足が石につまずいて転んでしまった。
「うわ、、、、」
ドサ！！！！！！！！！！！！
イッテェエエエエエエ強烈な痛みが襲った。
あ、やばい、追いついてきたアレに付いている触手が俺に向かってくるヤラレル瞬時にそう思った。
その時、「はぁぁあああああ」
シュバっっっっっ掛け声と共にアレが横に真っ二つに切られた。
ドサ、、
「君大丈夫か？」

異世界（後書き）

どうも～Ｒｙｏｕですｖｖ
初めての投稿です。まだまだ未熟なところがありますが、暖かい目で見守ってください。
なるべく早めに更新します。

異世界2

現れたのは、金髪で鎧を着ていて右手には長剣を携えているまさしく戦士といった
風貌の女性だった。キレイというよりカッコイイという言葉が当てはまりそうな女性で
そのあまりの美しさに少しの間見惚れていた。

「おい！！人の話を聞いているのか？大丈夫かときいているんだが。」

「はい！あの大丈夫です、助けていただいてありがとうございます。」

「そうか、怪我は無いか。よかった。ところで君はなんでこんなところにいるんだ？国の
人間ではないみたいだし。旅人か？それとも不審者か？」

彼女は剣を俺の首にあてて聞いてきた。

「いえ、あのですね、どういう訳か俺気づいたらこの森にいたんですよ。」

「なに？気づいたらここにいただと！？貴様、私を愚弄しているのか！！そんなわけがある
はずなかろう！」

「いや、そんなこと言われても事実なんだから仕方ないじゃないですか。そんなことより聞き

たいことがあるんです。ここは何処なんですか？」

「ふむ、ここが何処なのか知らないのか。まあいい教えてやろう。ここはセイル王国の近くにある＜ゲルの森＞と呼ばれる森だ。さて、ここが何処なのか知ったな。では一緒に来てもらおうか。貴様が不審者かどうか取り調べをする。」

彼女に手を引っ張られながら連行された。
どうする？逃げるか？いやそれはやめておこう。もし逃げて捕まったりしたらそれこそ自分は不審者ですといってるようなものだ。じゃあどうする？・・・そうだこのまま捕まってみよう。そうすれば取り調べで無罪となればいろいろと教えてもらえるしそのうえ自由の身だ。これぞまさに一石二鳥というやつだな。う～んでもとりあえず一番気になることだけでもきいてみよう。

「あの、もうひとつだけ聞きたいことがあるんだけど。」

「む、なんだ言ってみろ。私が答えられる範囲で答えよう。」

「あの怒らないでくださいね。この世界の名前ってなんですか？」

「なに？貴様この世界の名前すらも知らないというのか？それはありえない。この世界に生まれてきたものならば知らないはずがないであろう。貴様本当に何者だ？」

「え～と俺もしかしたら記憶喪失かもしれないんですよ。」

「ほう、記憶喪失か。おもしろいことをいう。分かったそこまでいうなら教えてやろう。ただし、もし記憶喪失というのが嘘ならば覚悟しておけよ。私はそんなに甘くないからな。ふふふふふ」

いゃゃやややややこぇえええええ〜〜〜。やばいってこの人絶対ドSだよ。目がそういってるもん。絶対ばれないようにしなきゃ。

「ふむ、さてこの世界の名前だったな。この世界の名前は、＜アルフォード＞というんだ。
この名前の由来は、はるか昔、この世界を作ったのが創造神アルフォード様だと言われているからだ。」

「へ〜そうなんですか。」

「うむ、そうなのだ。さて名前の由来も名前も分かったところで少し早めにいくぞ。夜が明ける前に国に着きたいからな。決して逃げようなどとは思わぬことだ。長生きしたければな。」

異世界2（後書き）

は～いＲｙｏｕです。
未熟ですが第２話更新ですです。
この調子でどんどん書いていきたいのでよろしくお願いします。

あと、意見や感想、直したほうがいいなと思うところがあったら、
気軽にかいてくださいね。

取調べ（前書き）

主人公の口調が変わってますがきにしないでください。

取調べ

「さて話してもらおうか。まず最初に君の名前を聞こう。」

机とイス以外は何も無い質素な部屋、ここは取調室である。そこで蓮は質問攻めにあっていた。

「蓮です。水月蓮といいます。あんたの名前はなんていうんだ？」

「私か？そういえば教えてなかったな私はエリス・クラインという。エリスと呼べ。

さて、質問を再開するぞ。ゲルの森になんの目的で入った？」

「いや、だから俺は気づいたらあの森にいたんだって。」

「ああ、たしかそうだったな。すまないな疑って。え～と次は、そうそう君は記憶喪失だったな。ところでなんで記憶喪失になったんだ？」

「だから記憶喪失で覚えてないんだよ。何度いったら分かるんだ！」

「いや、君のことだから嘘だったらすぐにボロがでると思ったのだ。悪気は無いんだ。まあでもこれで分かった。」

「何が分かったんだ？」

「ん？簡単なことだ、君は記憶を失っていない。そしてなぜかは知らないがこの世界のことは何一つ知らないというのが分かったことだ。どうだ？あってるだろう？」

「え～とそうなんですけど。なんで分かったんですか？」

「そんなのは簡単だ。君の目と国に入ってからのはしゃぎようだ。あれだけはしゃいでいたら
この国に初めて来たことは一目瞭然、それに記憶喪失の話をしているときの君の目は嘘つきの目だ。そういうのは今までの経験で分かる。この世界の名前を聞いてきた時の君の目は、本当に知りたがっていた目だったからな。」

「うわ～すごいな。それ正解です。よく人の目とか動作をみて嘘か本当か分かる人がいるというのは聞いたことがあるけど、まさかここまで分かるなんて・・・すごいな。」

「ふふ、そうか褒められて悪い気はしないな。
さて、じゃあ今度は本当のことを教えてもらおうか？なんであの森にいたんだ？」

「あの森にいたのが何でかは分からない。本当に気づいたらあの森にいたんだ。ただこれは俺の考えなんだけど、俺はあなた達の言う異世界から来たんだとおもう。なぜなら俺の世界では剣を振り回す女剣士はいなかったしあんな気持ち悪い動物もいなかったからな。」

「ほう、異世界か。いまいち信じられないな。仮にその話が本当だとして、どうやって君はこの世界に来たというんだ？そんな魔法聞いたことが無いぞ。」

「そんなこと言われてもどうやってきたかは俺にも分からない。それでも俺にとってこの世界が異世界だというのに変わりはないんだ。信じてくれよ。」

「君の目を見れば本当のことを言ってるのは分かるんだが、私では元の世界に帰すことはできないし、たぶんこの世界にいるどの魔術師にもできないぞ。これからどうするんだ？」

「どうするかはまだ決めてないけど、とりあえずどこかに泊めてもらって数日そこで考えてから決めようかなと思ってる。」

「そうか、それはだめだ。」

「ど、どうしてだよ？」

「君が不審者としてここに来たからだ。国の外の人間が不審者としてここに来て、たとえ無罪放免でも明後日にはこの国を出て行かなければならないんだ。それがこの国の掟なんだ。だから君は明後日までここで寝泊りし、その後、この国を出て行かなければならない。」

「そんな・・・じゃあ俺はどうすればいいんだ！！」

「安心しろ。私が君を間違って連れてきてしまったんだかわりに武器と防具、あと3日分の食事それからこの大陸の地図を買ってあげよう。

だから今日はもう寝ろ。良い子は寝る時間だ。あらかじめ違う部屋に布団を敷いておいたからそれをつかえ。私はもう帰る。」

「分かった。おやすみエリス。また明日な。」

エリスは片手をあげてそのまま帰っていった。

取調べ（後書き）

どうもＲｙｏｕです。
意見、感想おまちしてます。

武器屋にて

「うお～すごいな！！これが城下町か！」

今俺がいるのは、セイル王国にある城下町だ。日本に住んでいた俺にとってはこういうところに来たのは当然初めてで今すごくテンション上がりまくりナ状態なんだよな。

城下町には見たことの無い果物や野菜があって俺はなんだかやっと異世界に来たんだなっていう実感が沸いてきた。

「はしゃぐな鬱陶しい。君がはしゃぐとこっちが恥ずかしいだろうが少しは静かにできないのか！！」

「だってさ～どれも初めての事ばかりですっっっげえたのしんだもん！！しょうがないじゃん。」

「まぁ、楽しいのは分かるが、それでも少しは抑えろ。さっきから町の人達がこっちをみてるだろうが。」

本当だ、通り過ぎる人たちがこっちをちらちら見てる。うわ～やばいな少し恥ずかしくなってきた。

「すいません。少し抑えます。」

「まったく！！もういい。ほれ、武器屋に着いたぞ。好きなだけ見ていいからな。私は、仕事があるからもどる。夕方になったら迎えに来るから、それまでに選んでおけ。」

「ふ～ん仕事か。そういえばエリスはなんの仕事してんの？」

「私は、国直属の近衛兵の隊長をやっているんだ。」
「へ～っって！！お前こんなところで油売ってていいのかよ。仮にも隊長だろ。」
「いいわけなかろう。だからこうして今から仕事に行くのではないか。」
「ああ。そうだったな。引き止めたりして悪かった。いってらっしゃい。」
「いや、別にいい。それより蓮、ちゃんと武器選んでおくんだぞ。」
そういってエリスは俺を置いてせっせと仕事に行ってしまった。
「はあ～これからどうしよう。とりあえず武器でも見るか。」
そして俺は武器屋に入っていくのだった。
ガチャ
「いらっしゃい。」
武器屋にいたのは４～５０代位の白髪白ひげのおっさんだった。こっちを見向きもしないで新聞みたいのを読んでいる。
俺は店に飾ってある武器を文字どおり端から見ていった。
「何かいいのないかな～～。」
飾られている剣はいろんな種類があった。エリスが持ってるような

両刃の長剣や片手剣、大剣など様々な種類の剣があった。その中で俺の興味を引いたのは右端にある日本刀に似たような剣だ。なぜその剣に興味を引かれたかというと、他の剣には無いオーラのようなものがあったからだ。まるでこの剣が俺に買えと言ってるみたいに感じられた。なぜかは分からないでもそんな感じがした。

「少年、その剣を買うのか？」

！！

いきなりおっさんが話しかけてきた。

「ああ。これにするつもりだ。」

「ほう、少年なかなか剣を見る目があるみたいだのう。でもそれはやめておけ。その剣は魔剣じゃ。魔剣は持ち主を選ぶ。今まで約１５年その魔剣を抜けたものはいない。」

「へ～そうなんだ。でも俺はこの剣を買う。この剣が俺を呼んでる様な気がするんだ。」

「なるほどな。魔剣が呼んでいるか。では少年その剣を抜いてみろ。そして見事にそいつを抜くことができればその魔剣をただでやってもいいぞ。どうする少年抜いてみるか？」

そういっておっさんはニヒルな笑みを浮かべた。

「分かった。抜いてみる。」

俺は剣を手に取った。剣はスラっっっと言えるほど簡単に抜けた。刀身は黒一色輝いていた。俺はやっぱりすげぇと思った。抜く前でもそのオーラは他よりもすごかったのに、抜いてみたら抜く前より

も遥かに上まっていた。

「なんと・・・なんという輝きじゃ。」

おっさんは地面に膝を着きながらいった。

「これが魔剣かすごいな。すごいとしか言いようが無いほどすごいな。

おいおっさん！これ抜けたんだしただでもらっていいんだよな？」

「ああ。２０年武器屋をやっていてやっと現れた魔剣の持ち主じゃ。逆にこっちが貰ってやってくれといいたいくらいじゃ。」

「よっしゃーー！！武器げっとだぜ」

「ところで少年よ、分かっているとは思うがその剣が魔剣だということは誰にも言ってはならんぞ。魔剣はどの時代においても忌み嫌われる存在だからな。」

まぁそりゃそうだろ。魔剣って名前がつくぐらいだからな。

「ああ。分かったよおっさん。誰にも言わない。」

「うむ、それが長生きする秘訣じゃ。」

それからはエリスが仕事から帰ってくるまでおっさんと無駄話をして過ごした。

武器屋にて（後書き）

第４話ｕｐ！！

全然話が進まなくてすいません。次か次の次位には旅にでますので。

魔剣な一日

あの後、エリスが迎えに来て剣の値段を聞いたが、おっさんは約束を守りタダにしてくれた。
帰る途中にあった防具屋である程度の弱い魔法なら防げるローブがあり色々な色の種類があってその中で俺は黒のローブを選んだ。やっぱり色は統一したほうがかっこいいと思ったからだ。そうして武器と防具を買った俺はエリスに連れられて帰っていった。
今は夜。エリスも帰ってしまい一人ぼっちだ。別に寂しくはない。ただ暇なだけだ。

「あ～暇だな～何かないのかよ～」

そう言ってあたりを見回してもなんにもなく。ただただ暇をもてあますだけだった。

「ひ～ま～だ～！！」

「おい！兄ちゃんちょっとうるさいぞ。そんなに暇なら俺と話さねぇか？」

どこからともなくそんな声が聞こえてきた。

「え！！なんだ今の声！？誰かいるのか！？」

周りを見回しても誰もいない。

「どこ見てやがる。もっと下だ。目線を落とせ。」

目線を下げてみた。そこにあったのは、今日買った魔剣だった。

「いや・・・まさかな？」

「そのまさかだよ兄ちゃん。俺だ魔剣だよ。」

「・・・うそーーーー！！！」

「嘘じゃねぇよ。あとうるせぇ。」

「え、あ、ごめん。でもなんで剣がしゃべってんだ？」

「剣がしゃべっちゃいけねぇのかよ。あと俺は魔剣だそこらにある普通の剣と一緒にすんじゃねぇよ。ついでに魔剣って呼ぶんじゃねぇ。それは称号であって俺の名前じゃねぇ。」

「魔剣に名前ってあんの？」

「おうよ！俺様にはそりゃもう立派な名前がついてんだよ。」

「で？その名前ってなにさ？」

魔剣は胸をはって（胸無いけど）誇らしげに言った。

「俺の名前は黒帝（こくてい）だぜぇ。どうだいい名前だろう。俺を作った職人が付けた銘でなぁかなり気に入ってんだ。」

「へ～黒帝ね。うん、いい名前だと思う。」

「だろ？ところで兄ちゃんの名前はなんていうんだ？」

「俺か、俺は水月蓮っていうんだ。よろしくな黒帝。」

「なるほどなぁ。兄ちゃんは蓮っていうのか。じゃあ俺は次から兄ちゃんのことを蓮って呼ぶなぁ。

ところで蓮よぅ。なんでお前こんなところにいるんだよ？」

「いや～それがな不審者として捕まえられてな。でも明日になったら国外追放だから外に出れるんだよ。」

「へぇー。じゃあ蓮は旅人になんのか？」

「そういうことになるな。だから明日は早いんだ。もう寝てもいいか？」

「ん？なんだもう寝るのか？俺はまだまだ話たりねぇってのによ。」

「ごめん。でももう寝るから。続きは明日ってことで。おやすみ黒帝。」

「ちっ！分かったよ。おやすみ蓮。」

こうして蓮と黒帝の夜は終わった。

魔剣な一日（後書き）

Ｒｙｏｕですｖｖ第５話ｕｐしました。
次からは旅のお話です。少しでも楽しんでいただけたらなと思っています。

旅立ちの日

夜が明け眩しい日の光で俺は目を覚ました。起き上がり早速旅立の準備を始める。そのとき黒帝も起きだしたみたいで声をかけてきた。

「よぅ！蓮おはよう。今日もすがすがしい朝だなぁ。」

「あれ、黒帝も起きたんだ。おはよう。」

「おうよ。今日は蓮が旅に出る日だもんな。久しぶりに外の景色が見れるからなすげぇ楽しみなんだよ。」

「へ～そうなんだ。あ！！エリスが来たみたいだよ。」

ガチャ！とドアが開くような音がした。コツ、コツ、コツ、と規則正しい音がしてエリスが現れた。

「やあ。おはよう蓮。昨夜は良く眠れたかな？」

「ああ、おはようエリス。よく眠れたよ。」

実際は黒帝と夜中まで話していて、あまり寝ていなかった。でも俺はそれを言うほどバカじゃない。

「そうか。それはよかった。旅の準備もできているみたいだしもう行くか？」

「ああ、そうするよ。あまり長くいてもしょうがないしね。」

「そうか。じゃあ着いて来い正門まで案内してやる。」

そういってエリスはもと来た道を歩き出した。俺もその後に続いた。しばらく歩くと、正門が見えてきた。正門には門番がいてこっちを向くとエリスに挨拶をした。

「おはようございます。エリス隊長。そちらの方が今日旅に出るお方ですね？」

「ああそうだ。門を開けてくれるか？」

「分かりました。」

そういって門番は大きい門の右下にある小さい門を開けた。さっきエリスに聞いた話だが、この大きい門はよほどのことが無い限り開けないらしい。１０～１５年位までは開いていたらしいのだが、この大きい門が仇となり大規模な盗賊がどんどん国に入ってきたらしい。それ以来大きい方の門は貴族や商人が出入りする以外使われなくなったそうだ。

「蓮よ、ここから先は魔物も多くいるだろう。十分気をつけていくのだぞ。君の安全を祈っている。ではさらばだ蓮。旅をしていればまたいづれここに来る事もあるだろう。その時は君を歓迎しよう。今度は不審者扱いではなくな。」

「はは、まったくだな。不審者扱いはまっぴらだ。エリスも元気でな。今度来たときは歓迎してもらおうかな。じゃあねエリスまた会おう！！」

こうしてレンは旅に出るのであった。

戦闘（前書き）

あとがきに少しネタバレあり。

戦闘

国をでて今は森の中をさまよっている。時刻は夕方まだ魔物にはでくわしてないけど、朝から歩きっぱなしで少し疲れが見え始めた。

「黒帝少し休まない？」

「俺は別にいいぜぇ。蓮の好きにしな。ただ、ここら辺の魔物は夜行性だから夜になると襲われる確率が多くなるぞ。それでもいいなら休んでもいいぜぇ？どうする？」

「うっ！戦うのは面倒くさいからやだな。はぁ、じゃあ進むしかないのか。」

また一歩一歩歩き出す蓮。

「別にいいじゃねぇかよ。俺は戦うの好きだぜぇ。それに蓮がどれくらい強いのかも知っておきたいしなぁ。なぁ一度くらい戦えよ。あ～あ、魔物でねぇかなぁ？」

「ちょっと黒帝怖いこと言うなよ。本当にでてきたらどうするんだよ！」

背中に装備している黒帝にいった。

「いいじゃねぇかよ。殺せば。それとも蓮、お前剣扱ったこと無いとかないよなぁ？」

「そりゃあ俺は爺ちゃんに死ぬほど鍛えられたから多少は使えるけ

どさ。できればあまり使いたくないんだよな～疲れるしね。ようは、安全第一ってことで。」

そうやって雑談してたとき、背後から魔物が襲ってきた。

ウォォオオオオ！！！！！

ガキィン！！

蓮はとっさに剣を引き抜き魔物のつめを止めた。

「あぶねぇぇ。もう少しで死ぬとこだったじゃん。空気読めよな。」

そんな台詞とは裏腹に蓮は真剣な表情をしていた。

「なあ、黒帝さっき俺がどれくらい強いのか知りたいって言ったよな。少しだけ教えてやるよ。」

蓮は笑いながらそういった。その瞬間魔物の攻撃を受けていた蓮はその場から消え、魔物が気づいたときには背後にいた。

「じゃあな化け物。来世で会おうぜ。」

その言葉と共に魔物は首を刎ねられ絶命した。

「ああ疲れた。」

そういって蓮は魔物の血を祓い黒帝を鞘に戻した。

「蓮、お前強いじゃねぇか。なんで隠してたんだよ？」

「なんでって言われてもね。剣を使う機会が無かったから。」

「にしても感動したぜぇ。あの無駄の無い動きお見事としかいいようがねぇよ。
改めてこれからもよろしくな相棒。」

「うん。よろしく相棒」

こうして一人と一刀の絆は深まりまた次の国へと歩き出すのであった。

戦闘（後書き）

Ｒｙｏｕです。
やっと戦いましたね。
かなり蓮強かったですな。次に戦うときには流派とかでてくるんで楽しみにしててください。

マスターと門番と俺な一日

蓮たちは魔物を倒した後も森を突き進みしばらくすると森を抜け広大な草原が姿を現しました。

「おお～！すげえなー！見渡す限り緑一色こんなのはじめてみた。」

「ああ。たしかになぁ。ここは前とはちっとも変わってねぇな～。」

「あれ？黒帝ってここ来た事あるの？」

「まぁな。５～６０年前に一度前マスターに連れてこられたんだよ。」

「へ～そうなんだ。ところでマスターってなに？」

「マスターってのは俺のようないわゆる魔剣と言われている剣の持ち主の事を主にマスターと呼ぶんだぜぇ。分かったかぁ？」

「ふ～ん。じゃあ今黒帝の持ち主の俺はマスターなんだな？」

「まぁそういうことだ。」

「じゃあ前のマスターってどういう人なの？」

「詳しくは言えねぇが、少なくとも今の蓮よりは遥かに強かったなぁ。」

「ふ～ん。まあそんなことはどうでもいいけど、そろそろ次の国が

見えてきたみたいだよ」

かなり先のほうに国が見えてきて少しだけテンションの上がる一人と一刀。

「うおー本当だぁ。国が見えてきたな。なぁ蓮あの国どういう国だと思う？」

「ん～どういう国でもいいけどとりあえず不審者扱いされない国がいいな。」

「まぁそうだな。不審者扱いされたらどうする？」

「とりあえず逃げる。逃げ切れなかったら倒すかな。それから後のことはやったあとに考える。」

「それが一番いいな。まぁとりあえず行ってみようぜぇ。話はそれからだ。」

「だね。」

そうして一人と一刀は国に向かって歩き出した。

「おい！！この国になんのようだ？」

門番らしき人間が声をかけてきた。

（なぁ黒帝あの門番って人間？）

（まぁ人間っていったら人間だけど正式には獣人だなあの門番の場合は虎と人間の獣人だな。戦闘だけなら全種族の中で一番強いと言

われている種族だ。ちなみにクルガ族っていうんだぜぇ）

「おい！！聞いているのか！この国になんのようだ！」

「俺は旅人なんだ。それでこの国をたまたま通りかかったから見て行こうかなと思って。」

「なんだ旅人かそれで目的は観光な。最初からそういえってんだ。まったく。」

この後俺は正式に審査した後この国に入っていった。

宿屋探し

国の中に入ると早速宿を探した。エリスに泊まるところは早めに決めておいたほうが良いといわれたからだ。いろんな人に安くてうまい飯が食えるところはないか聞いた。

「安くてうまい飯が食える宿ね～。あ！！そうだこの先まっすぐ行った所に＜キャリーの天使＞っていう宿屋兼酒場があるからそこに泊まりな。多少値は張るが飯はめちゃくちゃうまいしなんといっても看板娘のナミちゃんは最高にかわいいしな。」

「へ～そうなんですか。分かりました。じゃあ行ってみます。」

「ああ、ついでに俺のことも言っておいてくれ。今度なんかサービスしてくれってよ。ちなみに俺の名前は、ガイジだ。よろしくな～。」

そういうとガイジさんは人ごみにまぎれて消えていった。

「いい人だったね黒帝。」

「ああ、そうだなぁ。どうでもいいから早くいこうぜぇ。こんな所で立ち止まっててもしょうがないねぇだろ。」

「うんそうだね。いこうか。」

一人と一刀は歩き出した。

「ここ？」

「ああ、そうだよ。＜キャリーの天使＞って書いてあるじゃねぇか。」

「いや俺ここに来たばっかで文字とか分からないんだよね。」

「そういえば異世界から来たとか言ってたよな？後でその辺の事を聞きたいんだけどよぉ、教えてくれるか？」

「うん。いいよ。ただし部屋についてからね。」

「わかったぜぇ。」

カランカラン！！
ドアを開けた。

「いらっしゃいませ～！！」

カウンターの方から1人の女の子が来た。

「適当に席に座っててください。注文取りにいきますから。」

「いえ、あの俺ここに泊まりたいんだけど。」

「あ！宿泊をご希望の方ですか。ちょっと待っててください。部屋空いてるか確認してきますから。」

女の子は厨房らしきところに行って３０秒位で戻ってきた。

「お待たせしました。。部屋は空いてるんでこの鍵使ってください。

」

「はい。ありがとうございます。それでここはガイジさんという人に紹介されたんですが。」

「ガイジさんにですか？」

「はい」

「そうですか。ガイジさんはうちの常連客なんです。あなたを連れてきてくれたガイジさんには今度なんかサービスしなきゃいけませんね。」

そういって女の子はカウンターに戻っていった。
そして僕は部屋に行った。
ガチャ。

「ああ～つかれたな。もう寝て良いかな黒帝？」

「ダメに決まってんだろ蓮。お前には聞きたいことがあるって言っただろうが。」

宿屋探し（後書き）

Ｒｙｏｕです。
今回は中途半端ですいません。
次の話ではなんと蓮の過去があきらかになる・・・・かも？

蓮の過去

「ほれ、早く教えてくれぇ。」

黒帝が急かす

「もう、そんなに急かさないでよ。話すからさ。」

蓮は天井を見上げたまま話始めた。

「俺さ、ここに来る少し前まで爺ちゃんと一緒に住んでたんだ。両親は俺が5歳になる前に死んじゃったらしい。」

「起きんか〜〜〜〜！！！」

ゴチン！！

すやすやと眠っている俺に爺ちゃんの拳骨が頭に降ってきた。俺は夢から現実に引き戻され飛ぶように起きた。

「いってぇぇぇぇぇ！」

赤く腫れた頭を擦りながらこっちを上から覗いている爺ちゃんを睨みつけた。

「なにするのさいきなり！！それに・・・うわ！！なんだよこれまだ朝の４時じゃないかよ。」

爺ちゃんは蓮の睨みに臆した感じも無く腰に両手をやり蓮を見下しながら言った。

「早起きは三文の徳と言うではないか。だから起こしたんじゃよ。」

「だからってこんなに早く起こすことは無いだろ。まだ外真っ暗じゃないか。」

蓮は怒りながらいった。

「まあまあ、あまり怒ってばっかりだと血圧が上がるぞ。」

「あんたが怒らせるような真似をしたんじゃないか！！」

蓮は怒りを通り越して呆れていた。爺ちゃんはだいたい1週間に1度こういう変なことをしだすのだ。今日はまだ良いほうだ。この前なんか起きたら折の中にいてクマと戦えととか言ってきて刀一本渡して帰っちゃったし。そのほかにも色々と・・・。

「で、今日はなんでこんな早い時間に起こしたのさ。爺ちゃんの事だから何かあるんでしょ？」

「ああそうじゃった。蓮よワシは今から1週間、お主に秘伝の奥義を習得するための修行をつけてやろうかと思っての。」

「え！！秘伝とはいえ奥義の習得に1週間もかかんの？」

蓮は驚いていた。それは当然だ。蓮は幼い頃から爺ちゃんに剣術を習い、ほとんどの技をだいたい3時間奥義でも最低半日で習得して

いた。それは普通ならありえないことだ。しかし蓮はその類まれなき才能で普通なら1週間で習得するはずの技もわずか3時間という脅威のはやさで習得していた。その蓮が習得に一週間かかるのだ。普通の人が習得するのにどれほどかかるのか。

「ああ、間違いなくかかるのう。最高1週間じゃ。遅くても蓮なら1ヶ月もあれば習得できるじゃろう。」

そういって爺ちゃんはいつも修行している道場の中に入りそこでするのかと思ったら爺ちゃんはその場にしゃがみこみ道場の床にあるタイルを取った。なんとその下には階段があり地下へと繋がっていた。

「ほれ、蓮早くこんか。」

爺ちゃんに言われて下まで降りていった。そこは上の道場と比べて、何にも無くただ奥の方に祭壇がありそこに巻物らしきものがあった。爺ちゃんはその巻物を手に取り俺に開いて見せた。

「蓮よ、今からお前に秘伝を授ける。下手をすれば死ぬかもしれん。それでもやるか？」

いつもの爺ちゃんの顔はそこにはなく、流派の長の顔がそこにあった。

俺は迷わずいった。

「うん。やるよ。そして絶対に死なない。約束するよ。」

「よろしい。ではこれより水月蓮に第５５代継承者として秘伝の技を授けよう。」

こうして秘伝の奥義の習得が始まった。

1週間後

蓮は無事秘伝を取得し、そして5日後、爺ちゃんが倒れた。脳梗塞だそうだ。蓮はすぐに救急車を呼んだんだが病院まで間に合わず救急車の中で息を引き取った。爺ちゃんが亡くなる前に蓮に話しかけてきた。

「蓮よ、すまないな。ワシは蓮に剣を教えてやることができなかった。それだけが悔いじゃ。
もっとお主には色々なことを教えてやりたかった。悔しいのう。そこでじゃ蓮、お主には4月から高校に行ってもらう。そこでワシが教えてやりたかったことを学んで来い。そこで真にワシが教えてやりたいことが分かる日がくるだろう。」

それが最後の爺ちゃんの言葉だった。

4月7日入学式当日クラスの発表があった。学校に行った事が無い俺は何もかもが新鮮だった。教室に入り中の様子を覗った。髪を金髪にしてる奴や変な髪形にしてるやつもいた。俺は
教室の一番右奥の窓際に座った。それから眠ってしまい、気づいたら異世界だった。
っていう訳だ。」

蓮の過去（後書き）

Ｒｙｏｕです。
今回は蓮の過去偏です。いろいろ考えるのがたいへんでした。あまり書き過ぎるとネタバレになっちゃうしね。

朝の会話

「へ～。じゃあ蓮は友達いなかったのか？」

蓮は少し不機嫌になりいった。

「ああ、そうだよ。その友達を学校で作ろうとしたらここにいたんだ。」

「ふ～ん。でもよぉ蓮、お前の世界では学校は蓮の年齢から行く決まりになってるのか？」

「いや違うよ。俺の世界では義務教育ってのがあって、子供は小学校と中学校は行かなくちゃならないんだ。でも俺は爺ちゃんにひたすら剣術だけをやらされて学校には一回も行ったことがなかったんだ。でもまったく勉強しなかった訳じゃなくて爺ちゃんに少し勉強も教わった。

そのおかげで多少の知識もあったが、この世界では役にたたないんだよね。」

「まぁそうだろうな。それこそ蓮の世界とは文化も違えば生活習慣も違う。おそらく俺がいなければ蓮はこの世界では生きることはできないだろうなぁ。俺をもっと敬えよ蓮。」

ああ、はいはい。軽い返事をして蓮は横になった。

「あ！！おい蓮まだ寝るんじゃねぇ！おい蓮！！」

よこからうるさい声も聞こえたが無視して蓮は眠った。

朝、蓮はいつもより遅めにに起きた。時刻は６時半。黒帝は寝ているので起きる前に下に行った。

「おはようございます。」

そこには昨日部屋を案内してくれたナミさんと見知らぬおじさんがいた。

「あ！！起きたんだ。早いね。いつもこんな早く起きてるの？」

驚いた様子で聞いてきた。

「いや、いつもより遅いほうだよ。昨日はおそくまで起きてたからねこんな時間になっちゃった。」

「あ～そういえば昨日遅くまで明かりついてたもんね。なにしてたの？」

「剣の手入れとか昔のことを思い出してたんだ。」

「へ～そうなんだ。」

「ちょっと！！いつまで私を無視するつもりなの？」

蓮とナミが話をしていると横からおじさんが話してきた。ていうか何このおじさん、今私って言ったよね？もしかしてアレか？オカマってやつか。少し気持ち悪いな。

「ごめんね店長。つい。」

「つい。じゃないわよ。まったくもう。ところでナミ自己紹介はしたの？」

「あ！！まだだった。ごめんね。私の名前はナミ・ルーシーっていうのよろしくね。で、こっちの人はガンフィール・ロックっていってこの店の店長なのよ。」

「あ、そうなんですか。僕の名前は、水月蓮っていうんだ。よろしく。」

「へ～ミナズキくんっていうんだ。珍しい名前だね。」

「違いますよ、蓮が名前で水月は家名です。」

「ああ、反対になってるんだ。ってことはレン君って東洋人？」

蓮はなにを言っているのかわからないが適当にあわせることにした。

「はい、そうですよ。」

「へ～そうなんだ。東洋人が来るなんて珍しいですねガンフィールさん。」

「ええ、そうね。東洋人は故郷を離れるということをしない種族だから珍しいわね。」

そういって二人は俺の顔をまじまじと見た。

朝の会話（後書き）

Ｒｙｏｕです。
なんと今日Ｒｙｏｕは中学校を卒業しましたｖｖ
４月からは高校生どきどきしますね。
ああ、早く４月こないかな～！！

ギルド登録

あの後、蓮は朝食を済ませ一度部屋に戻った。黒帝が起きていて部屋に置いていったのをかなり怒られた。

「まったく、なんで起こしてくれねぇんだよ。ずっと暇だったじゃねぇか。」

「いや～ごめん、ごめん。気持ちよさそうに寝てたからさお越しにくくってな。」

「たく！！しょうがねぇな～。今回だけだぞ次は無いと思えよ。それでこれからどうするんだよ？」

「ああ、さっきナミさんに教えてもらって旅人でも稼げる仕事がないか聞いてみたんだけど、
どこの国でもあるギルドっていう冒険者とか旅人がやる仕事があるらしいよ。」

「なるほどギルドか、その手があったな。それなら楽な仕事もあるしかなり稼げるな。じゃあ蓮は今からギルド登録してくるのか？」

「うん。そのつもり。ここから城の方に真っ直ぐいけばあるらしいから今から行こうかなと思ってね。」

「ああ、それがいいな。今すぐ行こうぜぇ。さっさと行ってライセンスとって金稼いでうまい飯食おうぜぇ。」

それから俺らは下に降りていって、ガンフィールさんに外出するこ

とを言った後ギルドにむかって歩いていった。特に何かがあった訳でもなく無事ギルドに着き中に入っていった。

ギィィィ。

扉を開く音と同時に中にいる人たちの視線が集まる。そのなかにはヤクザみたいないかつい顔の人や顔に傷がある人など様々な人たちがいた。カウンターのところには細い目をしたマスターが立っていてこっちを見てきた。

「いらっしゃい。なんか用でもあるのかい坊や。依頼なら向こうの掲示板にでも張っておいてくれ。」

店全体に響くような威厳のある声だった。

「いや、依頼じゃないですよ。ギルド登録しに来たんです。」

そう蓮が言った瞬間店の中の空気が静寂になった。次の瞬間には店中に大きな笑い声が響いた。

「「「「「「「ガハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」」」」」」」

「なに考えてんだ坊主。ギルド登録！？お前の様なガキがか？そりゃ無理だ。諦めて帰りな。

そんでもってママのおっぱいでも吸わせてもらうんだな。がははは。」

一人の男がそう言うと他の男達がまた一斉に笑い出しさらに、

「ママ～僕おっぱい吸いたいの。ママ～。きゃはははは」
などと言いまた笑い出す。そこまで言われてはさすがの蓮もキレテ近くにあったテーブルに拳を振り落とした。
ドゴン！！！！！！！
テーブルはふたつにぶっ壊れてさっきまで笑っていた連中も黙った。蓮は平静を保ちつつ言った
「ふ～。あなた達は少し黙っててください。俺はマスターに話してるんです。あんた達には話し掛けてないんで黙っててください。」
そんなことを言えば当然中にいた連中も黙っている訳はなく、男の一人が立ち上がり蓮に近づいていった。
「おいガキ！！てめぇなんのつもりだ！俺らに喧嘩うってんのか？」
「売ってるつもりはないですよ。ただあんた達があまりにもうるさくてしょうがなかったから黙らせたまでです。あんた達にどうこう言われる筋合いはない。」
「なんだとてめぇ。まじでムカついた。おいお前らこいつやっちまおうぜ。」
男がそういうとオォォォオオオオオオオオオオ！！！といって中にいた半分以上の男が立ち上がった。
そのとき、不意に頭の中にマスターの声が聞こえた。
「おい坊主。今立ち上がっている奴ら全員倒したらギルド登録させ

てやる。」

マスターは蓮に意思疎通の魔法を使い言ってきた。

それと同時に男達が襲ってきた。

ギルド登録（後書き）

Ｒｙｏｕです。
更新遅れてすいません。昨日姉にパソコン占領されてしまい更新できませんでした。

ギルド登録2

ウォォオオオオ！！目の前の筋肉質な男が拳を振り上げ突っ込んできた蓮はその攻撃を最小限の動きでかわし顔面を殴り吹っ飛ばし、その反動を使って短剣を持って向かってくる男に回し蹴りをした。キレイに弧を描いて他の男にあたり二人共動かなくなった。男達はそのまま向かってくるのかと思っていたら一人の男が他の奴らに指示をだした。

「おい！！このガキ只者じゃないぞ。囲め！！！」

その言葉で男達は蓮を囲み始めた。

・・・・これでも一応ギルドライセンスを持っているやつらだ。囲まれて一斉に襲い掛かれたらやっかいだな。どうしよう。やっぱり抜くしかないか。あ～面倒くさい。

蓮はそう思いながら黒帝を抜いた。すらっとした黒い刀身が表れる。店の中にいたほとんどの人の視線が集まる。

・・・しょうがないヤルカ。

蓮が構えた瞬間黒帝を見ていた連中が警戒した。そして指示をだしていた男が全員に言った。

「行け～！！！」

ウォォオオオオオオオオオオオオ！！

一斉に蓮に向かって攻撃した。

「桜爛流百花繚乱（おうらんりゅうひゃっかりょうらん）！！！！！」

蓮は、目に見えぬほどの速さで回転し、回転しながら敵全員を切り

倒した。見学していたマスター達には高速回転のなかで繰り出した剣が桜の花びらが舞うように見えたと言う。

グハァァァァァ！！

「またつまらぬものを斬ってしまった。」

くはぁぁぁ！！これ言ってみたかったんだよな。時代劇を見てたときからずっと言ってみたいと思ってたんだよな。ああ、いい、なんていうか快感だな～。

蓮はマスターの方に振り返り笑顔で言った。

「これでどうですかマスター？」

するとマスターは笑いながら

「ククク、ああいいよ。合格だ。まさか本当に全員倒してしまうとわね、恐れ入ったよ少年。坊やなんて言って悪かったよ。許してくれ。そしてライセンス取得おめでとう。こっちにきてこの書類に名前を書いてくれたら登録完了だ。」

そう言ってマスターは俺に書類を渡してきた。俺は一応エリス（※異世界2取調べ参照）と黒帝に名前の書き方とある程度の文字の読み方を教わった。特に黒帝には旅の途中にも文字を覚えさせられて大変だった。でも、そのおかげである程度の文字は読めるようになった。

書類にサインしマスターに渡した。

「はい。これでいいですか？」

「ああ、少し読みにくいが大丈夫だ。」

そして一度マスターは奥に入っていった。

「よかったな蓮。無事に登録できてよぅ。」

さっきまで黙っていた黒帝が話しかけてきた。

「だね。早くかたずけたかったから技使っちゃったけどね。」

「いいじゃねぇか別に。見られて困るものじゃないだろう？」

「まあ確かに見られて困るって事はないけどさ。疲れるんだもん。」

「疲れるって・・・俺さ蓮の性格で分かったことがある。面倒くさがりやだろぅ。どうだ？」

「まぁね。そんなところ。あ、マスターがくるよ。」

そういうと黒帝は黙った。そして店の奥からマスターが来た。

「すまんな。またせてしまったね。はいこれ。」

渡してきたのは一枚のカード。

「それがギルドライセンスだ。通常ギルドランクはGからなのだが、さっきの実力と謝辞の気持ちを込めてCランクにしておいた。」

「おお！ありがとうございます。ところでギルドランクってどうやってあげるんですか？」

「ランクを上げるには二つの方法がある。一つは同じランクの依頼をひたすらやってマスターに次のランクにあがるのに支障が無いか確認してもらったあと上がるほうほうと二つ目はこれは簡単だな。ただ自分のランクより高い仕事を５～１０回以上したり自分のランクより上のモンスターをこれまた５～１０匹以上倒したらあがれることになってるんだ。」

「へ～そうなんですか。それじゃあ明日からやりますから今日は帰ります。ありがとうございました。」

「ああ、じゃあ明日待ってるよ。」

そう言って今日は宿に帰った。

依頼とマスター

あの後宿に帰りライセンス取得の話をナミさんとガンフィールさんにしたら、ガンフィールさんが「それはよかったわね。じゃあこれからお祝いでもしましょうか。」などと言い、お店を閉めてパーティーをやった。

そして翌日、いろんなお店が立ち並ぶなかでギルドに向かって蓮は歩いている。

「なぁ蓮、どうゆうのをやるんだ？」

黒帝が話しかけてきた。

「ん～そうだね～できれば簡単でお金がいっぱいもらえるものがいいな。」

「ふ～ん。でもそんなのあまり無いと思うぜぇ。金をいっぱいもらいたいならモンスターの討伐とかそこらへんの依頼をやったほうがいいと思うけどなぁ。」

「討伐か～それもいいかもね。なるべく楽なのがいいけどなかったら討伐やって稼ごうかな。」

「ああ、それがいいとおもうぜぇ。」

話が済んだところでギルドについた。

ギィィィ

ドアを開き中に入る。するとマスターが声を掛けてきた。

「ああ、いらっしゃい少年。よく来たね。なんか飲むかい？」

「いえ、お金がないので遠慮しときます。」

そう言うと蓮は、依頼が張ってある掲示板に向かった。

「なにがあるのかな～」

掲示板に張ってあったのは＜ドラゴンの討伐Ｓランク依頼：１５０００ソルト！！＞や少ないもので＜薬草の採取Ｇ～ランク１０ソルト＞までまさにピンからキリまである。ついでにソルトっていうのは、お金の単位だ。１ソルトが日本円で１００円なんだそうだ。ちなみに１ソルトより下はセルになる。１セルは１円と考えれば良いらしい。

・・・色々な種類の依頼があってなににしようか悩むところだ。簡単でお金がいっぱいもらえるやつはないしね。高い奴は討伐だけしかないな～。どうしようこの際討伐やってみようかな。蓮は一つの依頼書に手を伸ばした。

「じゃあこれや「あたしこれやろ～」ろう。」

「「え？」」

二人が同時に選んだのはドラゴンの討伐の依頼。同じタイミングで同じ依頼書に触った二人は
両者共その手を離さないで

「手を離しなよ。これ俺が先にとったんだけど。」

「そっちこそ話してよ～あたしが先だったよ。」

「「む～」」

二人が譲らないといつの間にか来ていたマスターが

「こらこら二人とも手を離しなさい。破けてしまうだろ？」

と言って二人から依頼書を取り上げた。

「「あっ」」

二人はマスターの方に振り向いた。するとマスターは笑いながら

「本当におもしろいね君達は。で？何をしてたんだい？」

蓮が怒られた子供のような顔をして

「俺がその依頼をやろうとして掴んだら同時にこの人が掴んでそれでどっちがそれを先にとったか言い争いになって・・・」

「ふ～ん。なるほどね。その話は本当かいミラルーク？」

さっきまで蓮と言い争っていた少女が言った。

「うん。彼が言っていることは本当だよ。」

「そうか。じゃあ話は簡単だな。二人でパーティーを組めばいいんじゃないか。」

そう言うとマスターは手をポンっと叩いて

「じゃあこの話はこれで終わり。さあ二人共戦闘の準備をしてドラゴンを討伐してくるんだ。健闘を祈っているよ。」

そう言ってマスターは二人を店から外に出した。しばらく二人はマスターの行動と言葉に唖然としていた。

これからの事

マスターによってギルドを追い出された二人はとりあえず近くのレストランみたいな店に入った。小さなファミレスみたいな所だ。所々に変な模様があって店の雰囲気は静かでいい感じだ。

「まったく、勝手だよなあのマスター。」

「も～本当だよね～」

二人がグチを言っていると、店の人が水を持ってきた。

「ご注文が決まりましたら声を掛けてくださいね。」

と言うと他の客のほうに行ってしまった。このままでは埒があかない！と蓮の方から声を掛けた。

「は～。まあそんなことばっか言っててもしょうがないな。俺の名前は蓮、水月蓮って言うんだ。あんたの名前は？」

「あたし？」

「いや、あんた以外誰がいるんだよ！」

彼女が惚けたことを言ったので突込み気味に蓮が言うと、彼女は、にぱぁ！という効果音がつきそうなぐらいの笑顔で自己紹介をした。

「ごめんね～あたしの名前はミラルーク・ジェイ・アスフィルっていうんだよ。ミラって呼んでね１５歳なんだ～でね趣味は読書で一

応魔術師で～す。ギルドランクはAランクだよ。
ところで蓮は何ランクなの？」

「俺はCランクだ。ついでに言えば、年は１５で趣味は特にはないかな。一応剣士だ。」

「へ～蓮はCランクなんだ。ってえ？Cランク！！！ちょっと蓮！！ドラゴンの討伐はSランクなんだよCランクじゃ無理だよ！普通ドラゴンはSランクの人でも討伐はかなり難しいって言われてるんだよ。それをCランクでやるなんて・・・無謀だよ。やめたほうがいい。」

「う～ん。俺さSランクって言われてもそのすごさはよく分からない。そのランクの人と会ったことすらないからね。だからドラゴンがどんなに強いと言われてても俺には分からない。だって戦ったことがないから。じゃあその強さを知るには？簡単だよ、戦えばいい。戦って確かめたらいい。だから俺はドラゴンの討伐をやる。っていうのは建前で本当はただドラゴンがどういうのか見て見たいからなんだよね。」

ズルっ！！
さっきまで真剣に聞いていたミラは最後の一言でずっこけた。

「え、なに。じゃあ結局ドラゴン見たいだけなの？」

「まあねそんなところ。でも安心してよ、自分でいうのはなんだけど俺かなり強いから大丈夫
だと思うよ。だから一緒にドラゴンを倒そう。」

「う～ん、まあいいか。もしもの時は身代わりに置いてけばいいし

ね。」

蓮はいやいやさらりと怖いこと言わないでよ。と思ったがさっき大丈夫って言ってしまったので言えなかった。

「じゃあ二人で協力してドラゴンを倒そう〜〜〜。」

「オ〜〜！！」

二人で天に拳をむけた。そして二人はドラゴンを討伐するためレストランをあとにした。

龍（ドラゴン）討伐

現在俺とミラはドラゴンが住み着いている古い遺跡にいる。ドラゴンが入るせいか他の動物やモンスターが見当たらない。
俺とミラは遺跡の奥にドラゴンがいるだろうと推測し歩いている。

「なあミラ、ドラゴンにも色々な種類があるんだよな？」

「うん。そうだよ～ドラゴンにはね大きく分けて2種類がいるんだ。飛龍と陸龍っていって～その中でも炎龍、土龍、水龍、雷龍、風龍の5体は属性龍といって自然の力が使えるんだよ。で、今回討伐するのは炎龍だよ～炎龍は5体の属性龍の中でも一番気性が荒いんだ～攻撃力もあるしやっかいなんだよね。」

そう言うミラの顔は笑顔だった。

「まあでも安心してもしもの時は私が守ってあげるから。」

「身代わりにして置いていくんじゃないのかよ。」

「あはは、まだそれ言ってんの～あんなの冗談に決まってるじゃん。」

いやあの目はマジだった。冗談を言う奴の目じゃなかったよ。
そんなことを口にだそうかと思っていたとき、
ゾク！！！
突然強烈な殺気を感じた。その殺気をミラも感じたのか上を向いた。
するとそこにいたのは口を大きく開けたドラゴンだった。
グォォォオオオオオオオオオオ！！

ドン！！
大地を震わすような咆哮と共に視界を覆いつくすほどの炎が俺とミラに向かって放たれた。
俺はかわせないと思い迎え撃とうと剣を抜いたときミラが、
「動かないで。私が防ぐ。『大いなる水の精霊よ我等を守りたまえ』」
片手を前に突き出しミラが呪文のような言葉を言った。すると、俺らの周りに水のバリアーができ炎から俺らを守ってくれた。
「すげぇなミラ。どうやったんだ？」
すげぇ興奮しまくりな俺。無理も無い。俺がいた世界では魔法は無かったし、この世界に来てからも見たことがなかったからだ。
「どうって言われてもね。これ精霊魔法だからただ水の精霊達に私たちを守ってってお願いしただけだよ。たいしたことないよ。」
「いや、そんなことねぇって。たいしたことあるよ。だって俺は魔法使えないから、使えるミラはすごいと思うよ。」
「そ、そうかな？」
少し照れた様子でミラは答えた。
そしてその照れを隠すように言った。
「ほら蓮、まだ戦いは終わってないんだよ。私たちの目的はドラゴンを倒すことでしょ。さっさとやって帰ろう。」

そう言うとミラはドラゴンに目を戻した。
俺もそうだったと思いドラゴンに目を向けた。

「さて、ミラにはすごいもの見せてもらったから、今度は俺の番だ。ミラは下がっててくれ。」

「え・・でも・・」

「下がってろって。すごいの見せてあげるからさ。」

俺の自信に満ちた声を聞いてミラは数メートル離れた。

「いくよ黒帝、ドラゴンを切り刻む。」

そう言うと蓮は黒帝を構えた。

スッ

「桜爛流烈風桜波斬(おうらんりゅれっぷうおうはざん)」

龍（ドラゴン）討伐（後書き）

更新遅れてすいません。一日一回を目標にしてるのですが、色々と予定が重なったりしてうまく更新できなかったんです。
これからもなるべく一日一回の更新でがんばりたいなと思います。

龍（ドラゴン）討伐

「桜爛流烈風桜波斬（おうらんりゅうれっぷうおうはざん）！！」

蓮は黒帝を目に見えぬほどの速さで十字に振り、真空の刃を発生させた。真空の刃は炎龍に向かってとんでいく。
目に見えぬ斬撃、炎龍は下から何かが向かってくるのを感じた。炎龍はそれを回避しようとした。しかし気づくのが遅すぎた。真空の刃は身を捻ろうとした炎龍に当たりその身体を無残に切り刻んだ。

ガァァァアアアアアアアア！！！
ドカァアン！！！！

炎龍は蓮達の前に落ちた。お腹には大きな十字の傷ができていた。
ミラはその光景に唖然とし言葉がでなかった。

「ふぅこれで終わりか。なんか物足りないな。」

当の本人は疲れた様子も見せず黒帝を鞘に戻した。
そしてミラの方を振り返ると笑顔を見せ

「じゃあさっさと討伐した証としてドラゴンの角持って帰ろうぜ。」

といった。
ミラは蓮の言葉で我に返り慌てた様子で角を切り落とそうと再び黒帝を抜いた蓮に近づいていった。

「蓮って強いんだね～私驚いちゃったよ。」

「ははは、だから言ったろ！俺は強いから心配しないでいいってさ。」

「うん聞いてた。でもあんなに強いとは思わなかったよ～」

そんなドラゴンを倒した後とは思えないほのぼのとした会話をしていた。

すると角を切り落とした蓮が黒帝と呼ばれていた剣を鞘に戻そうとしたとき声が聞こえた。

「おい蓮、さっきの技すげぇなぁ。カマイタチだろ！？あんなどでかいカマイタチ見たことねぇよ。風系統の魔法使いだってああはいかないぜぇ！？」

すると蓮は私に聞こえないような声で（実際は聞こえてるけど）

（ちょっと黒帝、ミラにも聞こえちゃうじゃないか！！）

「ああ、大丈夫だよ。魔剣の声は所有者にしか聞こえねぇから安心しろ。」

（そ、そうなの？ならいいけどさ彼女がいる前とか街中で声かけないでよ。皆にも聞こえるのかと思って普通にお前と話してたじゃないか！！俺すごいあやしいじゃん。）

「ああそうだな。俺と話している蓮を見る町の人たちは皆お前に哀れみの目を向けてたからなぁ。それにそこのミラっていう女も俺と話しているお前を”何この人”みたいな目で見ているぞ。」

そう黒帝が言うと、今まで黙ってたミラが口を挟んだ。

「いや私が見ているのは蓮じゃなくて剣の方なんだけど。
な、なんでしゃべってんの！？ていうかそれ魔剣！？じゃあ蓮って魔剣のマスターだったの！？」

ものすごい驚いた様子で、そしていきおいで蓮に聞いてきた。
蓮はごまかすことなく、後でまた自分のことを聞かれるのが面倒なので自分が異世界から来たことから今までのことを全部ミラに話した。
蓮のすべてを聞いたミラはパクパクと口を開閉させて

「うそでしょ・・・・・・」

と言ってしばらく思考を停止した。
そして蓮はそんなミラの顔の前で手を振り

「お～い大丈夫か～帰ってこ～い」

とミラの意識が戻ってくるまで手を振っていた。

これからの事2

あの後、意識を戻したミラと炎龍の角を持ち帰りマスターのもとに行った。

「おお、お帰り二人とも。無事ドラゴン倒せたようだね。角をこっちへ、うん。確かに本物だね。じゃあちょっと待っててくれ。報奨金持ってくるから。」

そう言うとマスターは奥にいった。

ーー数分後ーー

マスターが茶色の質素な布袋を持ってきた。それを俺たちに渡して

「はい、報酬の15万ソルトだよ。ああ、それと蓮君ギルドライセンス貸してくれるかな？」

といってきた。

ライセンス？そんなの何に使うんだろう！？

そう思いながらもギルドライセンスをマスターに渡した。

するとマスターはライセンスを受け取りそれを緑色の箱の上にある挿入口に入れた。

しばらくすると、下にあった穴から落ちてきた。それをマスターは拾うと俺に渡してきた。

「おめでとう。CランクからBランクになったよ。」

「え、あ、ありがとうございます。でも何故？何でBランクになっ

たんですか？」

「それは君がドラゴンを倒したからだよ。ドラゴンはＳクラスのモンスターだ。それをＣランクの君が倒したということは、Ｂランクのモンスター１００匹分にも相当するんだ。
だから君は一つランクが上がってＢランクになったんだ。ちなみにＡランクになるためには君達が倒してきたこの炎龍をあと２～３体くらい倒さないとＡランクに昇格はないな。まあせいぜいがんばることだ。」

マスターはそう言って店の奥に行ってしまった。
俺らはお金も入ったことだしこれからの事を話合うために俺の宿に行くことにした。
夜なので辺りは真っ暗だが俺が泊まっているところは宿屋兼酒場なのでまだ営業していた。

カランカラン！！

「いらっしゃいませ～って蓮君じゃん。ん！？なにその女の子、もしかして蓮君その子にあんなことやこんなことをするつもり？」

あんなことやこんなことってなんだよ。と思いながらも言っている意味は分かるので即座に否定した。

「違う！！そんなんじゃない。こいつとはただギルドで会ってパーティーを組んで一緒にやったから今後どうするのかを話し合うためにここにきたんだよ。勘違いするな！」

「え～なにそれつまんな～い。まあいいや。話し合うのはいいけどもしここに泊まるだったら

あたしに声掛けてね。部屋用意するから。」

「ああ分かった。その時はそうするよ。」

ナミがまだ何か言おうとしたけど他のお客さんに呼ばれていってしまった。

俺たちは扉の前に居てもしょうがないので俺の部屋に行った。

「ここが俺の部屋だ。入っていいよ。」

扉を開けてミラを部屋に入れる。

「ふ～今日は大変だったな。ずっと歩きっぱなしだ。」

「うん。そうだね～私も疲れちゃったよ～」

「でさ、これからどうするよ？俺は明日にでもここを発つつもりだけどミラはどうする？

明日俺と一緒に行くか？」

そう俺が言うとミラはえ！？っていう感じの顔になり

「私、蓮と一緒に行ってもいいの？」

「ああ、俺はいいよ。ていうかそのほうがありがたい。俺にはこの世界の常識がわかんないからそういうのを教えてくれる奴は黒帝しかいないんだ。でもこいつとは町中では話せないだろう？でもミラだったらどこにいっても普通に話せるし、なんといってもミラは強いからな俺としては一緒に行動したいと思っている。どうだ？」

「うん絶対いく。私もね旅人なんだ。だから蓮と同じ色々な国を旅してるの。でもね最近一人は寂しいな～って思い出してきたんだ。だから一緒に行くよ。一人より二人の方が楽しいもんね！」

ミラが笑顔でそう言うとベッドの横に掛けてあった黒帝がミラに向かって怒ったように言った。

「おいおいミラちゃんよぉ俺のこと忘れてるんじゃねぇか？俺もちゃんと数に入れてくれないとぐれるぞこのやろうぅ。」

「あはははは！！ごめんね黒帝忘れてたよ～一人より三人だね。」

「そうだそうだ。わかりゃいいんだよぅ。」

と他愛無い会話をミラが眠いと言い出すまでしていた。

その日、結局ミラは＜キャリーの天使＞に泊まった。

出発と次の目的地

早朝、蓮は起きた。早朝といっても外は真っ暗。これからあと３０分もしたら日が差すぐらいの時間だ。
蓮は前の晩にあらかじめ用意しておいた荷物（荷物といっても黒帝と昨日の晩にガンフィールさんに貰った干し肉や携帯食料。あとは報奨金で買ったナイフを三本位だけだ。）を持ちドアを開けた。しばらく右に歩くとミラが寝ているであろう部屋に着いた。

コンコンッ！！

「入るぞ。」

ガチャッ！！
ドアを開けて部屋に入った。ミラの部屋は俺の部屋とほとんど変わらなかった。
まあ当たり前か。と思いベッドに近づいた。

「お～いミラ起きてるか～」

ミラは布団を頭まで被っていて顔が見えなかった。
返答はない。もう一度声を掛けてみる。

「お～いミラ～起きてたら顔をだせ～」

また返答はない。今度は起こすためにミラの身体を揺すり振りながら声を掛ける。

「おい、起きろ！！ミラ！お～き～ろ！！」

うう～んという寝言を言って布団から顔を出した。

「あれ？なんで蓮がいるの？おはよう～」

まだ眠そうな目を擦りながら言ってきた。

「ああ、おはようミラ。今日はこの国を出る日だって昨日言っただろう。だからお越しに来たんだ。まだ寝ていると思ったからな。」

「あ～そういえばそうだったね～でもなんでこんなに早いの？まだ夜じゃん」

と言うと、よいしょっ！！っと声を出しベッドから起き上がった。

「何言ってるんだ。日が出る前にここを出発するって昨日決めたじゃないか。」

「うそ～覚えてないよ？」

「お前な～覚えとけよ。とにかく昨日そう決まったんだからたとえ覚えてなかろうが覚えていようが関係ない。早く準備しろ。」

「分かったよ～」

ミラは返事をすると髪を整え部屋の掃除をしたあと荷物の整理をして部屋を出た。

俺とミラはガンフィールさんに教えてもらった裏口から外へ出た。

門に向かって歩いている。

「ねえ蓮、さっきから聞きたかったんだけどナミさん達にこの国を出て行くこと言わなかったの？」

「ん？ああ、それは昨日ちゃんと言ったよ。お金を払って今日国を出ることを伝えた。
そしたらなガンフィールさんが干し肉と携帯食料を二人分くれたよ。
今日の朝飯にしてくれってさ。」

「へ～ちゃんと言ったんだ。てっきり言ってないのかと思ってた。」

「なんでだよ。金払わないで出ていくつもりだと思ったのか？」

「うん。そう思った。」

「なんだとこのやろう～こうしてやる」

蓮はミラの両頬を摘んでこれでもかというぐらい左右に伸ばした。

「あひゃっやめれ、やめれ～ごめんなはい～」

蓮はしばらくそうした後手を離した。

「うう～痛いよ～」

「うるさい。あんこと言うミラが悪い！！」

そんなことをしているうちに門が見えてきた。
そこには来た時にもいた。門番がいた。

「ん？お前はあの時の旅人か。今日は何のようだ？」

「今日この国を出るんだ。だから通してもらいたいんだ。」

「ああ、この国を出るのか。これから何処に行くんだ？」

「それはまだ決めてない。これから決める所だ。」

「そうなのか。じゃあアルカニア王国に行ってみたらどうだ？ここからだったら2日も歩けば着く距離だしな。今だと確か武道大会が開かれてるんじゃないか？」

「いいなそれ。そこにしよう。いいだろミラ？」

「うん。わたしもアルカニア王国でいいよ。一度行ってみたかったんだよね～あそこ。」

「よし、決まりだ。じゃあ行こう。おっさん情報ありがとな～」

門番のおっさんに別れを告げて草原を歩いていった。

そしておっさんと呼ばれた門番は・・・

「おっさん・・・俺まだ２４なんだけど。そんなに老けてっかな～」

とうなだれていた。

精霊と崖っぷち

しばらく草原を歩くとまた森があった。中に入りひたすら出口を探して進む。途中多くの魔物（モンスター）にでくわしたがほとんどが雑魚だったのでとりあえず倒してから売れそうな物を剥ぎ取った。
そうしているうちに出口が見え、森を抜けた。そこには平坦な大地があった。そこを歩いている旅人が二人いる。少し間を空けて歩いていた
一人は上体を前に傾けて今にも倒れてしまうかのような形で歩いていた。それとは対照的に少し前を行くもう一人は汗一つ流さず疲れた様子も見せないで歩いていた。

「ね～蓮、私疲れたから休みたい～」

一人の少女は自分より少し前を歩いている一人の少年に言った。

「さっきからうるさいぞミラ！！もうすぐアルカニア王国に着くからそれまで我慢しろ！」

「でも～もうダメ～死んじゃうよ～」

「そんぐらいで死んでたまるか！喋る気力があるならまだ大丈夫だ。あきらめるな！！」

「うう～この人でなし～ばか～死んじゃえ～」

「人の悪口言う暇があったら歩を進めろ！！」

「もう、本当にもうちょっとで着くの～？」

「ああ、そのはず。地図ではここらへんなんだ。」

一人の少年改め蓮は地図を取り出しミラにも見えるように広げ、目的地を指で指した。

「んん！？あれじゃないかな蓮！！」

一人の少女改めミラは地図を見た後走り出し急に止まって蓮に言った。

「どれだ！？」

蓮も走りミラに追いつく。ミラが立て板場所は崖だった。平坦な大地の先が崖だなんて思わなかった蓮は少し驚いた。

「うわっ！！あぶね～落ちたら死ぬんじゃないか！？」

「そんなことはどうでもいいの！！ほらあれ見て！！」

ミラが指を指したのは崖の斜め下、そこには国としてはかなり大き目のまさに大国って言う感じの国があった。

「うお～すごいな！！でけぇ。」

蓮はここに来てから見た国の何処よりも大きい国に感嘆の声を上げた。

「ね！！すごいでしょ蓮！早く行こ！？」

「ああ、でもさどうやって行くんだ？まさか・・・・」

「そのまさかだよ。ここから飛んでいくんだ。」

「いや、無理、俺却下。」

「なんで？」

「落ちたら死ぬじゃん！？」

「大丈夫だよ！！私が魔法掛けてあげるから安心してよ。絶対に落ちないから。ね？」

「分かった。ミラを信じるよ。」

「えへへ～ありがとう。じゃあいくよ。『大いなる風の精霊よ我が前に姿を現せ』」

ミラの足元に魔方陣ができその中から小さい手のひらサイズの緑色の精霊が出てきた。人間だったらかなりの美人だったに違いないと思わせる容姿だった。

「ん～～！！久しぶりにでられた～ミラ！？久しぶり～～～会いたかったんだよ～」

そう言って緑の精霊はミラに抱きついた。

「うん。久しぶり、シルフィー私も会いたかった。」

ミラはシルフィーと呼んだ精霊を抱きしめかえし、その後、手のひ

らに置いてこれからしてもらいたいことを話した。

「シルフィー、私と蓮をあそこの国に連れて行って。」

「うん！！いいよ。ミラのお願いだったらなんでも聞いちゃう。でもさ～一つだけ聞きたいんだけどこいつ誰？」

シルフィーは蓮を指差して言った。

「シルフィーこの人は水月蓮君だよ。私の旅仲間なんだ。」

「俺は蓮だ。そうよんでくれ。後ろの剣は黒帝だ。よろしく。」

「おぅ、よろしくたのむぜぇ精霊の嬢ちゃん。」

「嬢ちゃんじゃなくてシルフィーです。そしてあなたは魔剣ですね。一応よろしく。」

自己紹介も済んだところでミラがじゃあお願いと言った。

「分かったわ。浮遊の魔法を掛けてあげる。」

シルフィーがそれ！！と言うと蓮とミラの体が魔力に包まれ、宙に浮いた。そしてそのまま崖伝いに急降下するとそのままアルカニア王国まで普通の人間では視認できない程の速さで進んでいった。

「はい！到着～」

突然止まった。目の前には大きな門がありそこにいた門番がいきなり現れた蓮達に剣を向けた。

勝手な門番

「なっ・・・なんだお前達は！？」

門番は二人居た。一人は現在進行形で蓮達に剣を向けている。もう一人の門番は・・・・寝ていた。

（えええ！！寝てんの！？この人すごいな～）

蓮は目の前で剣を向けてギャアギャア騒いでいる門番よりその斜め後ろで門に寄りかかって寝ている門番の方に目を向けている。

（こういう時に寝ていられるのっていいよね～面倒ごとに巻き込まれないしさ）

蓮が寝ている門番を見て思いを巡らせていると、

ムクッと起きだして辺りをキョロキョロし、俺達に剣を向けている門番を見つけたのか声を掛けてきた。

「おはよう・・・朝っぱらからナンパなんてするもんじゃないぞ・・・ゴウ」

ゴウと呼ばれた門番は、さっきまで寝ていた門番に聞き捨てなら無い事を言われ憤慨したように返した。

「そんなわけがないだろゼン！！！！！こいつらはいきなり俺らの前に姿を現したんだ！！

もしかしたらこの国を攻めに来たのかもしれない！！」

蓮は攻めに来たといわれそれは誤解だと寝ていた門番（ゼン）に言った。

「俺達は旅人だ！この国を攻めに来たわけではない！！

ただ近々この国で武道大会が開催されるって聞いたから来たんだ！」
ゼンは二人の話を聞き、やれやれといった感じでゴウに言った。
「ゴウ落ち着け。その子達は本当に武道大会に出るためにアルカニアに来たんだよ。」
「なんでそんなことが分かるんだ！！こいつ等の言うことを信用するのか！？」
「信用するもなにもその子達は本当事を言っているだけ。それをゴウがいきなり現れたからって剣を向けて攻めに来たって勝手に思って騒いだんだろ？その子達の話も聞かないで。
ゴウ、ゴウはもう少し落ち着いて物事を考えるようにしたほうがいいと思う。」
ゴウは反論したいところだがゼンは何一つ間違ったことは言ってないので反論できなかった。
「まっ！！そういうことだからごめんね！ゴウも悪気があってやったわけじゃないから許してやってくれ。
さあこっちに来てくれ国に入る許可をあげよう！！」
ゼンは門の中に入って行き蓮達も後に続く。するとゼンが門のそばにあった小屋の中に入って行き書類を持ってきて蓮達にそれを渡した。
「とりあえずこの書類には、ここに名前とこの国にきた目的を書いて。
こっちの書類には名前だけ書いて。こっちの書類は武道大会のやつ

だから使う武器があるならそれも書いて。」

二人は書類に言われたとおりに書いた。

「うん。これで良いね。じゃあ大会は明日からだからがんばれ。応援するから」

「ありがとうございます。武道大会で絶対優勝しますから！！」

と蓮が言うと、ミラも対抗心を燃やし

「私も絶対に優勝するからね。」

と言いゼンとゴウと別れ宿を探して明日に備えて早めに眠りに着いた。

勝手な門番（後書き）

更新遅れてすいません。
やっぱり高校生はいそがしいです。
部活に勉強と書く暇がなかなかなくて困ります。
今後不定期になってしまうかもしれませんがどうか見てやってください！！

武道大会1

「うぅ～ん！！いい朝だ！雲ひとつ無い空、澄んだ空気、地球にいたらこんな空気味わえなかっただろうな～」

蓮はいつもと同じく6時前には起きていた。窓を開けて澄んだ空気と出たばかりの太陽を見ていた。

「黒帝もそう思うだろ？」

「俺は蓮の故郷のことなんざ知らねぇからなぁ？でも見事に晴れたとは思うぜぇ」

「だよな～絶好の戦闘日和ってやつか！！」

「ん？蓮って戦うの嫌いじゃなかったのか！？」

「嫌いではないさ。ただ面倒くさいだけ。でも今日は特別。俺がこの世界でどれくらい強いのか試してみたいんだ！！」

「へぇ～珍しいこともあるもんだなぁ。ところで身体動かさないで良いのか？」

「ああそうだな！少しからだ動かした方がいいかもしれないな。」

そう言うと、蓮は黒帝を鞘から外し黒い刀身を振るいだした。

「うん、いい感じだ。よし！！今日は久しぶりに剣舞でもやってみるかな！？」

そして蓮は踊るように舞始めた。剣舞というのは技の一つ一つを組み合わせそれを古来からある踊りに合わせて剣を振るう。一見ただ闇雲に剣を降っているように見えるが、玄人からみれば一目見ただけで心奪われるような舞である。
数十分後準備運動を終わらせた蓮はミラが居る向かいの部屋にいった。

ガチャ！！

「お～い！！ミラ起きてっか！？そろそろ飯食いに行くぞ～」

ドアを開けてみると、ミラはベッドの上でいびきを掻いていた。

「う～ん・・・もう食べられないよ～むにゃむにゃ」

ついでに寝言も言っていた。
蓮は寝ているミラに近づき頭に拳骨を落とした。最近分かったことだがミラは非常に寝起きが悪い。だからどんなに揺すっても声を出してもなかなか起きない。そこで一度あまりにも起きないミラに腹を立てた蓮は頭を思いっきりぶったたいてやった。すると

「ひにゃあ！！！」

と言う掛け声と共に起き出すことを発見したのである。

「うぅ～痛いよ～」

「いつまでも寝ているミラが悪い！！ほれさっさと準備して飯食いに行くぞ。」

「分かった～すぐ行くから先食べてていいよ～」

「分かった、じゃあ先に行ってるな！くれぐれも二度寝なんかしないようにな！？」

「ほ～い」

その後、蓮がある程度食べ終わった時にミラが来て一緒に食べ始め30分後には食べ終えていた。
そして宿屋を出ると今日行われる武道大会の開催場所に行った。

「へ～すごい大きいね蓮！！」

「ああ、まさかこんな大きいとは思わなかった。」

そこには東京ドームを2個分はあるであろう程のでかさの闘技場があった。
さすがは大陸規模で行われる大会である。
蓮とミラは受付で番号が書かれたバッチを貰い控え室に向かった。

武道大会1（後書き）

武道大会2

俺とミラはそれぞれ違う控え室に入った。この大会では、男と女は別々で戦うシステムになっているそうだ。
だから控え室も別々になったってわけだ。ちなみに控え室は全部で５０室ある。
それにしてもムサイ！！！なんなんだこの異様なまでのむさくるしさは！！ていうかなんで俺の控え室には筋肉質のムサイ奴しかいないんだ！！ああ、いやだ～誰か控え室代えてくれ～
俺がそんなことを切に願っていたときアナウンスが入った。

「すぅ～お前ぇら～！！よくぞこのアルカニア王国武道大会来たなこのやろ～！！！」

息の吸う音の後に発せられた言葉は鼓膜が破れるんじゃないかと思わせる程の大きな声だった。
思わず耳を塞いでしまったがそれでも聞こえるその言葉に少し苛立ちを感じた。
うっせぇな～もうちょっと静かにできないのかな～ただでさえこんなむさくるしい所に入れられているだけでも腹が立っているのに加えてこの声、ぶっ飛ばしたくなるな～
と蓮が物騒なことを考えている内にルールの説明やらが話されていた。説明やら何やらはあらかじめパンフレットみたいのに書いてありそれに眼を通してきたから聞かなくても大丈夫だ。
そしてここからが本題。この大会ではまず予選から始まると書いてあった。しかしその内容は書かれていなく何をやるかはわからない。

「よぉ～し！お前ら準備はできてるな？ではこれより予選を開始する！！その内容は・・・

・・・戦いだ。今この放送を聞いている奴らは全員控え室にいるはずだ。

そしてその控え室こそがお前らが戦う闘技場だ！！そこで勝ち残った2名が本戦出場の権利を得る事ができる！！

最後に一つ・・・健闘を祈る！！始め！！！！！！！！！！！」

その言葉と同時に皆が動き出す。考える事は一緒。弱そうな奴から潰そうという事だ。

「はぁ〜うざいな。」

「おい、まずはお前だ、痛い目見たくなけりゃあ棄権することだな。どうする？」

クックックと筋肉質のムサイ男達が俺にその巨体を向ける。

はあ本当にうざいな。全員動けなくしてやるよ！！

男の一人が俺に触ろうと手を伸ばす。

ヒユッ

「え？？」

ぼと！！

何かが落ちる音がした。蓮に向かって手を伸ばしていた男は、肘から先が無いことに気づいた。

「あ・あ・ああああぁぁぁああああああああああああ！！！！！腕が！！

俺の腕がァァぁあああああああああ！！！！！」

「うるさい。」

ドッ！！
黒帝の柄の部分で首を一突き、その男は気絶した。
「弱いな、この程度かよ。なら技を使うまでもねぇ。
5秒だけ猶予を与えてやる。この男のようになりたくなければ今すぐ棄権しろ。」
全員がその言葉に込められた殺気にたじろいだ。
「5」
「4」
「3」
「2」
「ウォオオオオオオオオ！！」
集団の中に居た男の一人が雄たけびをあげた。おそらく気合を入れるためだろう。そして蓮に
突っ込んで来た。そしてそれに合わせるように、全員が蓮に向かってきた！！
「1」
ワァァァアアアアアアア！！！！！
「0」
低く殺気の篭った声、黒帝を握り締め向かってくる奴らを片っ端か

ら斬っていく、もちろん誰も殺さないように、かつ動けないように四肢を斬る。

数分後、そこに立っているのは蓮一人だった。

武道大会ミラ偏～1

へ～さすがは大会と言うだけあって強者揃いだね～結構控え室の数もあるって聞くから、他の
参加する人たちはこの控え室とは別の控え室にいるのかな？
まあそんなことはどうでもいいか～少なくとも私ははずれではないだろうしね！
なぜかって？ふふふ、実はねぇこの控え室にはなんとあのアルカニア王国一を誇る騎士団【アルベド・インペラトル】通称：白き翼とも言われている。
白き翼と言えば、この国に住んでいれば女の子は誰でも一度はなりたいと思う職業である。
そんな女性の憧れの的の騎士団が目の前にいるのだ。私の興奮は頂点に達している。
もちろん控え室には白き翼の他にも何人かいるのだが、全員白き翼に圧倒されている。
まあ私は楽しければそれでいいし、あの有名な騎士団とは一度戦ってみたいって思ってたんだよね～
ミラがそんなことを考えていると、女の人の声が聞こえてきた。

「はぁ～い皆さん、元気かしら？ようこそアルカニア王国武道大会に来てくれてありがとうございます。
さて皆さんにはこれから予選を開始していただきます。
とりあえず内容とルールを教えるので耳の穴をかっぽじってよ～く聞いてくださいね。」

なんかおもしろい人だな～
予選か、どういうのだろう？なるべく簡単なのがいいな～

「では発表しますね！え～と予選の内容は・・・ずばり、生き残りを賭けたバトルロワイヤル～！！！！！！！」

ドンドンパフパフ～と自分の声で言う司会者さん。
ミラはやっぱりこの人おもしろいな～
なんて暢気なことを考えていた。

「ではルールの説明をします。
え～と殺してはいけません。本選に出場できるのは、この予選で最後まで立っていた2名のみです！！ので皆さんどんどん敵を倒しましょうね～がんばってね～
じゃあ始め～～～～～～！！」

シュラッッ！！
騎士団の人や他の人を含む、ミラ以外の人達が各々の武器を抜く。
槍や双剣、大剣、鞭などを持っている人もいる。
皆目をギラギラさせて周りを見る。
すると一人の女が騎士団の一人に剣を向け突っ込んだ！！女は上段に斜めに切りに行く。
騎士団の女性は、それを片手で捌き、女の腹に拳を打ち込んだ。

ドスッ

「あがっっっ！！！！」

その女が倒れると同時に皆が動き出す。近くの相手を斬るために。
私の方にも一人騎士団の女性が来た。負けるなんて微塵も思っていない。そんな自信に満ち溢れていた。
ごめんね。私はすぐに魔法を発動させた。

『土よ岩よ我が意志に従え』

それを聞いた瞬間、騎士の女性の驚愕の顔。後ろに下がって避けようとするがもう遅い。

地面から岩の手が伸び、控え室と言う名の予選会場にいるすべての女性の動きが止める。

「な、何よこれ！！」

「動けないわ！！！！」

それからミラは情け容赦なく再び魔法を使う。フードの中から粉を出し空気中に撒く。

「これで終わりだよ。『我が前に立ちはだかる者達よその意志に反して瞼を閉じよ”眠りの森”』

岩の手に捕まっていた女達は、反撃する間も無く、夢の世界に旅立った。

そして魔法を解いた後、そこに立っていたのはミラだけだった。

そして女の人の声が会場にむなしく響く。

「本戦出場は、ミラルーク・ジェイ・アスフィル選手です！！！！！！」

武道大会3

今俺は、本戦出場者の控え室にいる。この控え室は予選の会場となった控え室とは違い男女一緒であった。
今いる女の数はそんなに多くなく2～3人程度しかいない。その中にミラの姿はなかった。
まあだからといって蓮が心配するかというと、

「遅いなミラは、何をしてるんだか。あいつの事だから予選突破したけど控え室の場所が分からなくてあたふたしてるか、それか予選でとてつもない敵と当たってしまい、やられてベッドの中かそのどっちかだな！！」

と勝手に決めつけ、我ながら的を射た答えだな。うんうん！！とうなずいていた。
とそのとき、扉の向こうから気配を感じ振り返った。
ギィィ！！
そこから顔を出したのは、ミラだった。
ミラも蓮を見つけたのか小走りで向かってきた。

「蓮！！蓮も予選突破したの！？」

「ああ、まあな。それより遅かったじゃないか、強い奴と当たったのか？」

「ううん！ちがうよ。ただ道に迷っただけ。強い人とは当たんなかったけど雑魚ではなかったな。魔法つかっちゃったしね。」

「へ～ミラに魔法を使わせたのか。たいしたもんだ。

まあでもこれからが本番だからな、気張っていかねぇとな。」

「うんそうだね～これからが本番だよね～この中にもちらほら強い人いるし、すごい楽しみだな～」

俺とミラが話しているとどこかから声が聞こえてきた。

『は～い皆さん～予選突破おめでとうございます。そして君達にはこれから明日行われる本戦の対戦表を作りたいのでクジを引いてもらいたいと思います。いまからそちらに係員の人が来ますから順番どおりに引いてくださいね～』

そこで声は聞こえなくなり、ドアからは3人の黒服にサングラスを着た男達が入ってきた。
その手には二つの箱と二人で持ってきたホワイトボードがあった。
そのホワイトボードにはすでにトーナメント表が二つ書かれてあった。

「ではこれよりお前達にはこの箱からクジを引いてもらう。男は右から、女は左から引いてもらう。今からお前らに付いているバッチの番号を読み上げるから、呼ばれた奴はクジを引きに来い。では１番から！！」

こうして始まったくじ引き、俺とミラの番号は２５４番と３２５番であり、まだまだ呼ばれる雰囲気ではなかった。
～～１０分後～～

「最後３２５番！！」

とミラが呼ばれ、ミラは箱の中からクジを引いた。それをホワイト

ボードに書き
すべて終わった。そしてトーナメント表が配られ、それを持って皆ホテルやら家やらに帰っていった。
第一会戦のミラと蓮の対戦相手は、
ミラルーク・ジェイ・アスフィルＶＳシンドリー・キルバイサー
水月蓮ＶＳグラム・ゾルグ
という組み合わせになり。二人が宿に帰ろうとしたとき声を掛けられた。
「よう、お前が蓮か！明日はお互い全力を尽くそうぜ！！」
と言って蓮の対戦相手のグラムが手を差し伸べてきた。俺もその手を取り、
「ああ、全力を尽くそう。明日を楽しみにしてるよ。」
握手をして分かれた。
一方ミラの方も声を掛けられていた。
「あなたがあのこの世界にあるあらゆる魔法が使えるという≪エレメンタルマスター≫の二つ名を持つミラルーク様なんですね！！私シンドリーって言います。
こんなところで会えるなんて、私すごい感激です。あなたに憧れて私は魔法使いになったんですよ！！」
「そうなんだ～そういってもらえるとうれしいな～で・も明日は私

容赦しないよ？だからあなたも本気で私と戦ってね～楽しみにしてるから。」

「はい！！明日は私も本気でやらせてもらいます。たとえ憧れの人でも私はあなたを倒すために全力を尽くします。だから覚悟してくださいね！！それじゃあ私はこれで。」

そう言うと、転移魔法を使って居なくなってしまった。

「おいミラ、話は終わったか？俺たちも帰るぞ。」

「うん今行く～」

そして蓮達は会場を出た。

武道大会４（前書き）

しばらく待たせてすいません><

武道大会４

朝、いつもどおりに起きた蓮はミラを起こし朝食を摂っていた。

「なぁミラ、今日の調子はどう？」

「私は最高だよ～本戦に出場する選手は全員強そうだから楽しみなんだ～蓮は？」

「俺も最高だね。今日戦う奴が可哀想になるくらいな」

「ふ～ん、でも今日蓮が戦う人強そうだよ～簡単に勝てるとは思えないけど・・・」

「大丈夫だ、俺は強いからね。で、ミラはどうなんだ？勝てそうなのか？」

「うん、多分ね～」

「なんだよそれ～ん？？もうこんな時間か・・・早く会場に行かないとやべぇな。」

そんな感じで朝の会話を終え会場に向かい走り出した。
数分後には会場に着き、控え室に入る。
控え室にはすでに何名か来ていてその中にこれから蓮と戦うグラムが居た。
グラムも蓮を見つけたのか話しかけてきた。

「よう、蓮！！今日は最高に楽しい戦いをしようぜ！」

「ああ、今日はよろしく頼む。あと手加減はするなよ？」

「あたりめぇだ、誰が手加減なんかするか！！俺は誰が相手だろうと手加減はしねぇ、その時その時で最高の戦いをするのが俺の主義だ。だから逆に言わせて貰う、一撃で終わるなんていうのはなしにしてくれよ？」

グラムは返事を聞かないで控え室から出て行った。蓮とミラが来る前に放送が入っていたらしく蓮と戦う為に反対の選手控え室に行った。

そして蓮とグラムの戦いが始まる！

司会の男が蓮とグラムを戦いの場に呼んだ。

［第一回戦第一試合、今大会初出場その驚異的な力で予選を勝ち抜いてきた黒き剣士水月蓮～！！！そして南の島アイル島出身今大会３度目の本戦出場を果たし、今年こそはチャンピオンになると豪語していた巨大な斧使い！！グラム～ゾルグ～！！！」

闘技場には右に赤、左に青のゲートがあり、蓮は赤、グラムは青のゲートから姿を表した。

二人とも中央に行き握手を交わす。そして手を離したと同時に二人は後ろに下がる。

審判が開始の合図をし、戦いの火蓋が切られた。

［始め～！！！！］

司会の男が始まりの合図をしたと同時に蓮は黒帝を抜き、グラムは巨大な斧を出現させ突っ込んでいく！蓮は下から、グラムは上から切りかかった。

ガキィィィン！！

二人の斧と剣がぶつかりそしてまた離れる。二人とも動かず相手の出方を覗っている。先に仕掛けたのは蓮。

「いくよ！！桜爛流歩法桜幻花（おうらんりゅうほほうおうげんか）！」

蓮は構えを解き真正面にグラムを見る。

グラムは、何をやる気だ？と警戒心を強め蓮の動作一つ一つに気を配る。

しばらくすると蓮は剣を構えグラムに向かって走り出した！グラムは即座に構え斧に魔力を溜める。蓮がグラムの射程距離に入った。

「ばかめ！！斧龍斬！！！」

魔力を溜めたその一撃を蓮に放つ！！魔力を込めた斬撃は確実に蓮を捕らえた。

ドォォォォォォォン！！！！！！！

斧の一撃が地面に当たりその衝撃で砂煙が巻き上がる。闘技場の様子が分からなくなった。

砂煙が消え始め黒い影が見えてきた。

果たして立っているのはグラムなのか！？

武道大会5

煙が消え、立っていたのは蓮であった。黒帝を鞘に収めゲートに向かっていく。観客も司会の男も審判も蓮はグラムにやられたと思い込んでいた。しかし立っていたのは蓮でグラムは地面に突っ伏している。しばしの静寂・・・・・・そして

［第一回戦第一試合勝者・・・水月蓮～～～！！！］

ワァァァアアアア！！

闘技場に溢れんばかりの歓声が鳴り響く。

――――控え室――――

一回戦を勝ち抜いた蓮を待っていたのは笑顔のミラだった。

「おかえり～それとおめでとう～蓮ねら勝てるって思ってたよ。」

「ああ、ありがとな。まさか技を使わせられるとは思わなかったけど。」

「そうだよ！私もまさか蓮が技使うなんて思わなかったけど、それだけ相手が強かったって事でしょ？ならしかたないよ。気にしたっ

てしょうがない。ところでさ～あれどうやって倒したの？私が最後に見たのは相手のグラムに斧で一刀両断されているところだったから驚いたよ！だからあの後なにがあったのか教えて？」

「別にいいけど、詳しくは言わないぞ。ミラが見たのはただの幻（まぼろし）。実際俺がいたのはグラムの頭の上。
で、あいつが威力の高い技で俺の幻を地面ごと斬った。斬った感触で幻だと気づき砂煙で何も見えないなかで俺の気配を探していた。まあその姿があまりにも隙だらけでな思いっきり延髄（えんずい）殴って気絶させてやった。で煙が消えた時に立っていたのは俺だったって訳」

「へ～やっぱり蓮はすごいね。私もがんばらなくちゃ！！」

よ～し！と気合が入っているミラ。

「お前は三回戦だろ。もうすぐ二回戦も終わるから準備したほうがいいぞ。俺は観客席で見てるから」

二人が話している間に二回戦が終わり司会の男が高らかに勝者の名前を挙げている。

［第二試合勝者！！ディーン・ブレッディー！！！］

ワァァァァアアア！！

歓声を上げる観客達。それを聞き、蓮は俺の相手はあいつか・・・とディーンの事を見た。そして次に戦うミラはすでに臨戦態勢に入っていた。

「行ってくるね蓮。」

「ああ、がんばれよ。」

うん！！と笑顔で返事をし闘技場に向かって歩いた。

そして司会の男による紹介。

［第一回戦第三試合！！今大会初出場世界中で数少ないＡランクの持ち主！あの≪エレメンタルマスター≫の二つ名を持つ魔法使いなら誰もが憧れる魔法使い！！ミラルーク・ジェイ・アスフィル～！！！そして迎え撃つは、こちらも武道大会初出場の魔法使いシンドリー・キルバイザー！！！さあこの魔法使い対決どちらが勝つのか～］

ミラとシンドリーが闘技場の中央で握手をかわす。

「よろしくね～！！」

「はい！よろしくお願いします！！」

そして両者共に後ろに下がり審判が開始の合図をした。

「始め！！！！」

武道大会5（後書き）

遅れてすいません（＞＜）
なにぶん学生なもんで色々忙しいんです。
まあ言い訳ですけどね・・・・・・
まあできるだけ早く更新したいと思っているので楽しみにしている人はいるか分かりませんがよろしくお願いしますね～

武道大会6ミラ偏～2

先に仕掛けたのはシンドリーお箸ぐらいの長さの杖を振り詠唱した。

『我は水の精霊ラブと契約せし者我が意志に従いその姿現せ』

すると空中に魔方陣ができ、そこから青色の精霊ラブが現れた。容姿はこの国に来る途中にミラが召喚したシルフィーとは違い男の精霊のようだ。

（ふ～ん、シンドリーちゃんは精霊魔法使いなんだ～）

「よし行きますよラブ！！絶対に勝ちましょう！！！」

『へ～今日はいつもよりはりきってんな～なんで張り切ってんのか知らないけど力貸してやるよ』

するとシンドリーは杖をラブは手を前に出し魔法を唱えた。

『『数多の水よ渦巻け』』

二人の前に五つの水の玉が二人の前で回転しながら現れ、そして詠唱と共に一つ一つの水球が渦巻いた。

『『数多の水よ一つと成りて渦巻く閃光の如く敵を貫け”渦巻く水劉（すいりゅう）』』

これを聞いたミラは「これは・・・やばいわね」といい詠唱に入った。

『土よ水よ合わさりて我を守る盾となれ”樹海の盾”』

シンドリーとラブから一つとなった水が渦を巻いて閃光の如くミラに向かう。
ミラの魔法が発動しミラを囲うように大木が立った。

二つの魔法が激突した。渦巻く水劉はミラを囲う大木を破壊しようとするが威力が弱まるかのように小さくなりやがて消えた。

「さすがですね！！合成魔法が使えるなんておまけにその木の能力ですか！？私の水が全部吸い取られてしまいました。」

シンドリーはミラを尊敬の眼差しで見ていた。が、次のミラの言葉でそれは変わる。

「すごいでしょ～この魔法気に入ってるんだ～だってこの魔法がある限り私の前では水魔法はほぼ無力化されますからね。
次はどんな魔法を見せてくれるんですか？あと一回だけチャンスをあげます。どんな魔法を使ってくるのか楽しみにしていますよ～」

舐められてます・・・・・・・・シンドリーはそう感じた。奥歯をかみ締め、悔しみを怒りに換え自分が持つ最高で最強の技を使うことを決意した。

「あれやりますよラブ」
『あれやるのか！？』

ラブが驚愕の表情を浮かべる。なぜなら今からやる魔法は、最近覚えた合成魔法、そのなかでも上位に位置する魔法だ。まだ成功したことはなく、今やっても成功するかどうかは分からない。

「うん。覚悟を決めました。絶対に成功させます。」

『しかたねぇな。じゃあ俺が全力でサポートしてやるからシンドリーは魔法の成功を信じて詠唱しろ。そうすれば必ず成功するはずだ。』

「はい、では行きますよ！」

『おう！！』

『『水よ風よ合わさり真の姿となれ』』

二人の前に冷気が漂う。

『『氷よその姿千刃の如く』』

『『雪よ嵐に纏え千刃の氷よ嵐に混じれ』』

『『我が前に立ち塞がるものすべてを打ち砕け』』

『『合成魔法：氷雪の暴風』』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8334d/

異世界のどこかで！？

2010年10月11日23時26分発行